

選択肢の数と認知的完結欲求が 意思決定過程に及ぼす影響

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程3年

佐藤 史緒

問題と目的

欲しいものは何でも自由に選択することができるという豊かな社会の中で、選択肢の数が増加していることが報告されている (Schwartz, 2004; Schwartz, Ward, Monterosso, Lyubormirsky, White, & Lehman, 2002)。選択肢の多さは、生活の豊かさの指標として捉えられ、生活の質の向上と考えることができるが、選択肢の多さによるマイナス面についても指摘されている (Iyengar & Lepper, 2000; Schwartz, 2004; Schwartz et al., 2002)。選択肢が多い決定場面においては、決定までにたくさんの時間や労力が必要とされ、心理的ストレスが高まり、決定後の後悔感情が大きくなることが示唆されている。さらに、Iyengar & Lepper (2000) では、選択肢の多さは、選択状況に対する魅力を高めるが、選択肢の中から最良のものを選ぶという義務感により、最終的な購買行動に対する動機づけを低下させることが明らかになっている。

選択肢の数の増加は、たくさんの中から選ぶことができるという豊かさや自由さという点において選択場面に対する魅力を高めるが、実際にそのの中から選択するという場面では、決定を困難にさせる可能性が考えられる。決定を困難にさせる要因としては、選択肢の数=情報量の増加があげられるであろう。選択肢の数の増加により、選択肢それぞれがもつ比較すべき情報量が増える。よって、単純に処理できる情報量を超えてしまう可能性がでてくる。比較すべき情報量が増えると、情報過負荷 (information overload) 状態になり、単純な決定方略が取られやすい (Payne, 1982; Timmermans, 1993; Wright, 1975)。

意思決定スタイルは、Schwartz et al. (2002) が後悔-追求者尺度 (Regret & Maximization Scale) を用いて、最良のものを求める欲求の個人差による分類をおこなっている。常に最良の選択を追求するマキシマイザー (追求者) は、すべての選択肢を比較しようとするため後悔しやすい。また、サティスファイサー (満足者) は、満足できる選択を目指すタイ

プであり、自分の中の基準が満たされた時点で、選択肢の比較をやめるため、満足度が高く後悔が小さい。選択肢が多い場面においては、最高の選択肢を求めるマキシマイザーよりも、満足できるものを求めるサティスファイサーのほうが、より満足度の高い決定ができることが示唆されている (Schwartz, 2004; Schwartz et al., 2002)。また、情報の処理や判断の仕方として熟慮型-衝動型や分析型-直感型など、認知スタイルによる意思決定スタイルの分類もおこなわれている (上市・楠見, 2004)。たとえば、上市・楠見 (2004) では、思考の個人差要因として批判的思考をとりあげ、批判的思考の高さが、分析型の意思決定スタイルと関連することが示されている。廣岡・小川・元吉 (2000) では、批判的思考に対する志向性が、認知欲求と関連しており、適切な基準や根拠に基づいた論理性をともなった理解をする傾向であることが示されている。

意思決定場面では、情報を適切に処理し判断・選択をおこなわなければならない。情報処理に対する動機づけを測定する尺度としては、認知欲求尺度 (神山・藤原, 1991) や認知的完結欲求尺度 (鈴木・桜井, 2003) などが開発されている。情報処理量との関連において、認知欲求と認知的完結欲求は、取り上げている情報処理活動の側面に違いがあることが指摘されている (鈴木・桜井, 2001)。認知欲求は、主に情報を精査することに対する動機づけを測定しており (神山・藤原, 1991)、日頃どの程度考えるかといったような、日常における思考活動を対象としている。一方、認知的完結欲求は、日常生活と判断場面の両方における情報処理活動に対応しており、認知的完結欲求の高い人は、判断場面において情報処理量が少なく素早く判断することができ、特に決断性の高い人は、判断が必要とされる場面において適切に素早く判断できることが示唆されている (鈴木・桜井, 2001)。

このように、意思決定スタイルは、欲求や情報処理、思考の個人差などによってさまざまな分類はおこなわれているが、意思決定スタイルと選択肢の数による選択場面との関連についての検討は多くはない。例えば、最良のものに対する欲求と決定に対する満足度との関連 (Schwartz, 2004; Schwartz et al., 2002) や、比較すべき情報量と決定方略との関連 (Payne, 1982; Timmermans, 1993; Wright, 1975) については検討されている。しかし、決定方略とも関連があり、情報処理の仕方や判断内容などにも影響を与えると考えられる情報処理動機との関連はみられていない。そこで、本研究では、決定場面の個人差要因として、情報処理動機をとりあげ、意思決定過程に及ぼす影響について検討をおこなう。情報処理動機の測定には、判断場面の情報処理活動にも対応している認知的完結欲求尺度 (鈴木・桜井, 2003) を用いた。認知的完結欲求は、「決断性」、「秩序に対する選好」、「予測可能性に対する選好」の3つの下位因子からなるが、これらの下位因子は比較的独立したものであり、使用の際には下位尺度の得点を検討する必要があることが指摘されている (鈴木・桜井, 2001)。そのため、本研究では、情報を分析・処理する思考態度に関連のあると考えられる「決断性」を取り上げ、その影響について検討をおこなう。

また、選択肢の数の増加による心理的ストレスの高まりがみられているため (Iyengar & Lepper, 2000 ; Schwartz, 2004 ; Schwartz et al., 2002)、本研究では、心理的ストレスを決定場面における労力と捉え、決定がどの程度大変であったかを指標とした「決定に対する困難度」について検討する。選択肢の数が多い場合には、「決定に対する困難度」が高くなることが考えられるが、決断性が高い人は、情報の判断に対する労力が小さいため「決定に対する困難度」は低いことが予想される。

さらに、Iyengar & Lepper (2000) では、選択肢の多い選択場面に対する魅力が高いことが示されている。提示された選択肢の中から1つを選ぶ決定状況においては、決定場面そのものに対する楽しさや自信の程度が、決定の際の労力や満足度に影響を与えることが考えられる。そこで、本研究では、「決定に対する自信」や「決定に対する楽しさ」についても検討をおこなった。

仮説 ① 選択肢の数が多いほうが、少ない場合よりも決定に対する困難度は高い。

② 認知的完結欲求のひとつである決断性の高い人は、決定に対する困難度が低い。

方 法

実験参加者

都内の専門学校生108名 (男性74名, 女性34名, 平均年齢27.05歳, $SD=6.07$) を対象とした。参加者は、質問紙をランダムに配布され、少数選択肢条件 (50名) と多数選択肢条件 (58名) に割り当てられた。

実験デザイン

選択肢 (少数選択肢条件・多数選択肢条件) × 決断性 (高群・低群) の実験参加者間計画であった。

質問項目

携帯電話選択場面 はじめに、「携帯電話アンケート」として、携帯電話購入場面を想定し、提示された携帯電話からひとつを選ばせた。少数選択肢条件では5個の携帯電話を、多数選択肢条件では15個の携帯電話を提示した。各携帯電話の情報は、表1のように、重量・受信メール最大保存件数・メインカメラ画素数・カタチ・便利機能・人気順位の情報を用意し、それぞれ文字または数字で示した。次に、携帯電話を選んだ理由について記述式で回答させた。その後、提示された携帯電話の中から、どのように1つに絞ったかについて、記述式で求めた。

判断態度に関する質問 携帯電話を選択したときのことについてたずねた (すべて5件

法)。項目は、①操作チェック項目（2項目）：提示された選択肢の数（携帯電話の数）が多かったかどうか、提示された情報の数（重量やカメラ画素数など）は多かったかどうか。②携帯電話を選ぶ際の「決定に対する困難度」に関する項目（7項目）：1つに決定する際に、どのくらい迷いましたか／どのくらい難しさを感じましたか／どのくらい大変だと感じましたか／どのくらい混乱しましたか／どのくらい苦労しましたか／どのくらいイヤになりましたか／どのくらい疲れましたか。③携帯電話を選ぶ際の「決定に対する自信」に関する項目：1つに決定する際に、どのくらい自信がありましたか。④「決定に対する楽しさ」に関する項目：1つに決定する際に、どのくらい楽しかったですか。⑤選んだ携帯電話に対する「満足度」に関する項目：選んだ携帯電話に満足していますか。⑥携帯電話に対する関心項目：携帯電話に関心はありますか。

個人差要因の測定 認知的完結欲求尺度（鈴木・桜井, 2003）20項目・6件法（「1：全くあてはまらない」～「6：非常にあてはまる」）を用いた。尺度は、「決断性」、「秩序に対する選好」、「予測可能性に対する選好」の3つの下位因子からなり、それぞれ認知的完結欲求の3側面として捉えられている。

表1 提示した携帯電話の情報（少数選択肢条件の場合）

	携帯A	携帯B	携帯C	携帯D	携帯E
重量	142g	149g	132g	120g	127g
受信メール最大保存件数	1000件	992件	700件	800件	880件
メインカメラ画素数	320万画素	511万画素	520万画素	280万画素	200万画素
カタチ	おりたたみ	スライド	ストレート	おりたたみ	スライド
便利	指紋認証	おまかせロック	指紋認証	おまかせロック	お財布ケータイ
人気	5位	9位	6位	4位	2位

手続き

質問紙を用いた実験は、授業時間の一部を利用し、対人関係に関する調査とともに実施した。質問紙は「判断態度と対人行動に関するアンケート」という冊子になっており、「判断態度」と「対人行動」¹⁾の2部構成からなる質問紙であることが説明された。質問紙はすべて「判断態度」の後に「対人行動」について回答する流れであった。全員が質問紙に回答終了後、その場で回収をおこなった。回収後、質問紙についてディブリーフィングをおこなった。

自由記述文の分析

決定した理由や決定の仕方について回答を求めた記述文については、テキストマイニングをおこない、数量データに加えて、質的なデータからも解釈を試みた。分析には、テキストマイニングソフトであるTRUE TELLER（野村総合研究所）を用いた。テキストマイニングとは、言葉や文章であるテキストデータから、ノイズを取り除いてルールやパターンを発

見していく手法である（藤井, 2005）。質的データは、分析や解釈が研究者の主観によるものが多く、分類結果が研究者の解釈によって異なるという信頼性の問題が挙げられる。しかし、テキストマイニングのプロセスでは、データは形態素解析や構文解析などの数量化の手法によって統計解析がおこなわれるため、信頼性の問題を補うことができる（藤井, 2005）。

そこで、本研究では、決定の理由や決定の仕方についての記述の中に、どのような単語の頻出が高いかを分析し、単語の特徴から、選択肢のどの情報に注目しているかについて検討をおこなった。また、決定の仕方については、どの情報を選んだまたは削除した、などの係り受けの集計を用いて解釈をおこなった。なお、TRUE TELLERは、文章を単語ごとに分割する形態素解析、単語の係り受け関係を把握する構文解析、単語や係り受けの集計などをおこなう多変量解析を自動でおこなう機能をもつ。よって、まず同義語や同義係り受けを統一する作業（たとえば、「選ぶ」と「選択する」を同じ単語に統一するなど）をおこない、その後単語の出現頻度を算出した。

結 果

操作チェック

提示された選択肢の数（携帯電話の数）が意図されたように認知されていたかどうかを検討するために、選択肢の数が多かったかどうか（5件法）について、少数選択肢条件（ $M=1.92$, $SD=0.92$ ）と多数選択肢条件（ $M=3.79$, $SD=1.18$ ）による t 検定をおこなった。その結果、多数選択肢条件のほうが少数選択肢条件よりも、選択肢の数を多いと認知していることが確認された（ $t(106)=9.08$, $p<.001$ ）。また、選択肢の数だけでなく、提示された情報の数（重量やカメラ画素数など）についても多いと認知しているかどうかについて検討した。少数選択肢条件（ $M=2.20$, $SD=0.86$ ）と多数選択肢条件（ $M=3.07$, $SD=1.34$ ）による t 検定をおこなった結果、多数選択肢条件のほうは少数選択肢条件よりも、提示した情報を多いと認知していることが示された（ $t(106)=4.08$, $p<.001$ ）。よって、多数選択肢条件は、少数選択肢条件よりも、選択肢の数、または提示された情報に対して多いと認知していることが確認された。

認知的完結欲求尺度

認知的完結欲求尺度の下位因子のひとつである「決断性」に関する8項目（ $\alpha=.85$ ）の合計値を算出し（ $M=27.05$, $SD=6.07$ ）、平均値により「決断性」の高群・低群に分けた。

決定に対する困難度

選択肢の中からひとつを決定する際に、決定がどの程度困難だったかについて、7項目

(1つに決定する際に、どのくらい迷ったか／どのくらい難しかったか／どのくらい大変だったか／どのくらい混乱したか／どのくらい苦労したか／どのくらいイヤになったか／どのくらい疲れたか)を「決定に対する困難度」の得点として合計値を算出した($\alpha = .91$)。

「決定に対する困難度」について、選択肢(小数選択肢条件・多数選択肢条件)×決断性(高群・低群)の分散分析をおこなった結果、決断性の主効果が有意であった($F(1, 102) = 5.48, p < .05$)。決断性高群($M = 14.29, SD = 0.96$)よりも決断性低群($M = 17.36, SD = 0.89$)において困難度が高いことが示された。

決定に対する自信、楽しさ

「決定に対する自信」について、選択肢(小数選択肢条件・多数選択肢条件)×決断性(高群・低群)の分散分析をおこなった結果、選択肢の主効果が有意であった($F(1, 102) = 5.80, p < .05$)。多数選択肢条件($M = 3.21, SD = 0.15$)よりも少数選択肢条件($M = 3.75, SD = 0.17$)において「決定に対する自信」が高いことが示された。

「決定に対する楽しさ」については、主効果、交互作用ともに有意ではなかった($ps > .10$)。

選んだ携帯電話に対する満足度

選んだ携帯電話に対する「満足度」について、選択肢(小数選択肢条件・多数選択肢条件)×決断性(高群・低群)の分散分析をおこなった結果、決断性の主効果が有意であった($F(1, 102) = 3.30, p < .10$)。決断性低群($M = 2.94, SD = 0.16$)よりも決断性高群($M = 3.35, SD = 0.17$)において、選んだ携帯電話に対する「満足度」が高いことが示された。

提示された携帯電話の中から選択された携帯電話

少数選択肢条件と多数選択肢条件において、それぞれ選択された携帯電話を表2に示す。少数選択肢条件では携帯電話Aの選択率がもっとも高かった。多数選択肢条件では、携帯電話Hの選択率が高く、携帯電話G・K・N・Oは選択されなかった。

携帯電話を選んだ理由

提示された携帯電話の中から、どの情報に着目してひとつの携帯電話に決定したかを検討するため、携帯電話を選んだ理由について、テキストマイニングをおこなった。なお、テキストの中には、名詞や形容詞、動詞がそれぞれ分かれているが、注目した情報を捉えるには名詞がもっとも適切であると判断し、表3に各条件別の理由記述文に頻出した名詞上位10個を示した。表中の「件数」は、その単語を使用したテキストの数を示す。

次に、理由として注目した情報をどのように評価して選んだのかを検討するために、名詞

表2 選択された携帯電話（選択肢条件別）

	少数選択肢条件		多数選択肢	
	人数	%	人数	%
携帯A	15	30.00	6	10.50
携帯B	4	8.00	5	8.80
携帯C	10	20.00	3	5.30
携帯D	14	28.00	5	8.80
携帯E	7	14.00	1	1.80
携帯F			11	19.30
携帯G			0	0.00
携帯H			14	24.60
携帯I			5	8.80
携帯J			1	1.80
携帯K			0	0.00
携帯L			1	1.80
携帯M			5	8.80
携帯N			0	0.00
携帯O			0	0.00
合計	50	100.00	57	100.00

表3 選択肢条件別決定の理由記述に頻出した名詞（上位10個）

頻出順位	多数選択肢 (58)	件数	少数選択肢 (50)	件数
1	おりたたみ式	21	おりたたみ式	18
2	画素数	17	画素数	13
3	人気	9	カタチ	12
4	カタチ	8	重量	6
5	件数	8	カメラ	5
6	重量	8	ストレート	5
7	保存	8	保存	5
8	カメラ	6	スライド	4
9	メール	6	メール	4
10	ストレート	4	件数	4

表4 条件別理由記述文に見られる名詞-形容詞の係り受け（上位5個）

頻出順位	多数選択肢 (58)				少数選択肢 (50)			
	名詞	件数	形容詞	件数	名詞	件数	形容詞	件数
1	重量	8	軽い	8	画素数	13	高い	3
2	画素数	17	高い	5	画素数	13	多い	3
3	人気	9	高い	4	重量	6	軽い	3
4	おりたたみ式	21	良い	4	カタチ	12	良い	2
5	画素数	17	良い	3	画素数	13	良い	2

と形容詞の係り受けについて、上位5個を表4に示した。

その結果、携帯電話の機能や特徴を示す単語が多い中、多数選択肢条件においては「人気」という単語がみられており、携帯電話を選ぶ際に「人気」が「高い」から選んでいることが特徴としてみられた（表4）。

携帯電話の選択の仕方（選択肢の絞り方）

提示した選択肢の中からどのように1つに絞ったかについて、記述された選択肢の情報（名詞）と選択肢の情報をどうしたのかという部分にあたる動詞について検討した。表5に選択肢条件別による名詞の頻出（上位10個）、表6には頻出した動詞（上位5個）を示した。また、表7は、多数選択肢条件における、名詞と動詞の係り受けである。

表5より、頻出した名詞については、どちらの条件でも「画素数」がもっとも多くみられた。条件による違いとして、多数選択肢条件には「人気」という単語がみられ、少数選択肢条件では「消去法」という選択肢の絞り方についての単語がみられていた。「消去法」が含まれた詳細な記述文をみると、「消去法で決定した」や「カタチ、画素数について消去法を使って決めていった」というようなものであった。

表6より、動詞の頻出は、多数選択肢条件では「絞る」という単語が一番多くみられたが、少数選択肢条件では「選ぶ」という語が多くみられていた。表7において、多数選択肢条件において「絞る」という動詞の頻出が多くみられた内容としては、「おりたたみ式に絞って」や「画素数をみて2つに絞り」、「情報の中から1つに絞った」などがみられた。

考 察

選択肢条件と決断性による「決定に対する困難度」では、選択肢条件による困難度の違いは確認できなかったが、認知完結欲求のひとつである決断性の高い人において、困難度が低いことが示された。決断性の低い人は、重要な決断を素早くおこなうことができず決断するのに苦勞する傾向があるため、困難度が高くなることが考えられる。情報処理量との関連においても、認知的完結欲求の高さ、とくに決断性の高い人は、情報処理量が少ない状態で判断が可能であることが示されている（鈴木・桜井, 2001）。このことから、決定の際の困難度には、決断性が重要な要因となることが確認された。本結果では確認できなかったが、選択肢が多くなると、決定までに時間や労力を必要とするため心理的ストレスを高めることが示唆されている（Iyengar & Lepper, 2000；Schwartz, 2004；Schwartz et al., 2002）。また、情報の処理能力における情報過負荷状態になると、心理的ストレスの高まりにより決定することが困難になり、単純な決定方略が取られやすくなる（Payne, 1982；Timmermans, 1993；Wright, 1975）。決断性の高さは、判断場面における情報処理活動に対応しており、

表5 条件別選択肢の絞り方の記述文に頻出した名詞（上位10個）

頻出順位	多数選択肢 (58)	件数	少数選択肢 (50)	件数
1	画素数	18	画素数	14
2	カタチ	13	カタチ	10
3	人気	13	カメラ	8
4	おりたたみ式	13	おりたたみ式	8
5	重量	10	メール	5
6	カメラ	6	重量	5
7	メール	5	消去法	5
8	機能	5	スライド	4
9	件数	4	指紋	4
10	消去法	4	人気	3

表6 条件別決定の仕方記述文の動詞（上位5個）

頻出順位	多数選択肢 (58)	件数	少数選択肢 (50)	件数
1	絞る	13	選ぶ	11
2	選ぶ	12	おりる	3
3	おりる	7	思う	3
4	ある	5	ある	2
5	見る	4	決める	2

表7 多数選択肢条件における名詞と動詞の係り受け

頻出順位	名詞	件数	動詞	件数
1	おりたたみ式	13	絞る	5
2	画素数	18	絞る	4
3	目	3	つく	3
4	1つ	2	絞る	2
5	カタチ	13	みる	2
6	画素数	18	選ぶ	2
7	最初	4	つく	2
8	順位	2	見る	2
9	人気	13	ある	2
10	中	5	選ぶ	2

情報処理量とも関連があることから、多数選択肢状況において決断性の高い人は、低い人よりも心理的ストレスが低いことが考えられる。

選択肢条件別による選択肢の絞り方については、自由記述文の分析から、多数選択肢条件において「絞る」という単語が多くみられており、ある情報の中で比較し、自分の基準にあったものを決定したというような内容であることが確認されている。少数選択肢条件では「絞る」という単語はみられず、「選ぶ」や「決める」という単語が多くみられていることから、注目した情報を選びとるという決定の仕方をとっていることが考えられる。以上より、多数

選択肢条件＝情報量が多い選択場面においては、情報を比較することに労力がかかるため、比較するというよりも、情報を減らしていくことでひとつに決める傾向にあるであろう。ただ、本研究では決断性条件別による、選択肢の絞り方については検討していないため、今後、決断性の高い人がどのような情報処理をおこなっているかについて分析することにより、より決定に対する困難度を下げるような決定方略について考えることができるのではないかと考えている。

また、「決定に対する自信」は、少数選択肢条件において高いことが確認された。これは比較すべき情報が少ない条件は、すべての情報に目を通すことができるため、より自分の求めるものを選択できる可能性が高いからだろう。多数選択肢条件では、多くの情報を削除し絞り込んで決定しているために、もしかしたら他の携帯電話のほうがよかったかもしれないという気持ちが関連するのではないかと考えられる。選択肢が多い場合のほうが選択状況に対する魅力が高まる (Iyengar & Lepper, 2000) が、本研究においては、選択場面に対する楽しさは確認できなかった。これは、選択肢の提示の仕方によって選択状況に対する魅力が変わるのではないかと考えている。例えば、Iyengar & Lepper (2000) では、スーパーマーケットにおいてジャムやチョコレートを用いて検討をおこなっているが、本研究では携帯電話の実物を使用せず、情報を文字で提示している。そのため、決定の際には携帯電話のデザインなどを考慮に入れることができないということが関連している可能性もある。日常生活における決定場面では、ひとつひとつ情報を比較するだけでなく、直感や見た目で決めることも多い。その場合には、やはり選択肢が多いほうが選択状況に対する魅力は高まるであろう。選択状況に対する楽しさや魅力には、視覚的な要素が影響を与えている可能性があり、そのため本研究では、選択肢の多い選択場面に対する楽しさが確認できなかったのではないかと考えられる。今後、実物を使って実験的検討をおこなうことで明らかにすることが可能である。また、Wright (1975) ではレジスターを利用して大学生を対象に実験をおこなっているが、大学生にとってレジスターは自我関与の低いものである。本研究で使用した携帯電話の情報は、専門学校生にとっては大変熟知度が高く自我関与が高い。自我関与が高い選択対象は、選択肢がもつ情報について熟知していることが多いため、選択肢の情報を比較する際の処理能力や、自信、楽しさに影響を与えたと考えられる。

選んだ携帯電話に対する「満足度」は、決断性が影響していることが示された。決断性の高い人は、判断場面において自信をもって素早く決定することができる傾向があるため、決定後に対する満足度も高まったと考えられる。意思決定場面では、決定に対する「満足度」の逆の方向として「後悔」感情について検討されている。本研究では後悔についての項目は設けなかったため、今後は決断性が満足度に影響を与えるだけでなく、後悔にも影響を与えるのかどうかについて検討をおこなう必要がある。

本研究では、提示された携帯電話から、なぜその携帯電話を選んだか（理由）、どのよう

に選択肢を絞ったか（決定の仕方）について、自由記述文の分析をおこなった。理由記述文では、多数選択肢条件において、「人気」が「高い」から選んだという内容がみられた。少数選択肢条件では「人気」という単語はみられていない。多数選択肢条件では、情報量が多いために、自分で直接情報を比較する方法ではなく、他者の意見を参考にして比較する方法を利用したことが示唆される。自由記述という質的な分析においても、選択肢の数が増えると情報処理過程に労力がかかることが確認できたと考えられる。また、これまでの決定方略に関する研究では、情報の処理の仕方に着目した検討が多いが、情報処理過程において他者の情報を有効に利用することも十分に考えられることである。特に、決断性の低い人や決定場面においてストレスの高まる人のように、より労力の小さい決定を目標とした場合には大変有効なものと考えられるため、今後は他者の影響についても考えていきたい。

引用文献

- 藤井美和 (2005). テキストマイニングと質的研究 藤井美和・小杉孝司・李政元 (編著) 福祉・心理・看護のテキストマイニング入門 中央法規出版 pp.13-28.
- 平山るみ・楠見孝 (2004). 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論生成課題を用いての検討— 教育心理学研究, **52**, 186-198.
- 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 (2000). クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 三重大学教育学部研究紀要, **51**, 161-173.
- Iyengar, S., & Lepper, M. (2000). When choice is demotivating : Can one desire too much of a good thing? *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 995-1006.
- 神山貴弥・藤原武弘 (1991). 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, **6**, 184-192.
- Payne, J. (1982). Contingent decision behavior. *Psychological Bulletin*, **92**, 382-402.
- Schwartz, B. (2004). The paradox of choice : Why more is less. (瑞穂のりこ (訳) (2004). なぜ選ぶたびに後悔するのか「選択の自由」の落とし穴 ランダムハウス講談社)
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubormirsky, S., White, K., & Lehman, D. R. (2002). Maximizing versus satisficing : Happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 1178-1197.
- 鈴木公基 (2009). 認知的完結欲求が他者選好に及ぼす影響—確かさを追求する人は、他者に社会的スキルを求めるか— 人間環境学会紀要, **12**, 31-42.
- 鈴木公基・桜井茂男 (2001). 認知的完結欲求：情報処理量および対人関係性からの検討 筑波大学心理学研究, **23**, 153-160.
- 鈴木公基・桜井茂男 (2003). 認知的完結欲求尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74**, 270-275.

Timmermans, D. (1993). The impact of task complexity on information use in multi-attribute decision making. *Journal of Behavioral Decision Making*, **6**, 95-111.

上市秀雄・楠見孝 (2004). 後悔の時間的变化と対処方法—意思決定スタイルと行動選択との関連性— *心理学研究*, **74**, 487-495.

Wright, P. (1975). Consumer choice strategies : Simplifying vs. optimizing. *Journal of Marketing Research*, **12**, 60-67.

¹ なお、本論文では、「判断態度」についての結果のみ報告する。

The effects of the number of alternatives and the need for cognitive closure on decision making process

SATO, Shio

The purpose of this study was to examine the psychological effects of choices, particularly emphasizing the number of alternatives, and the need for cognitive closure as a moderating variable. One-hundred and eight vocational school students (74 males and 34 females) were randomly assigned to either the limited-choice condition (choosing one from 5 cell-phones) or extensive-choice condition (choosing one from 15 cell-phones) and asked to complete a questionnaire which included several key questions aimed to tap the dependent variables. Participants were also asked to complete the need for cognitive closure scale. The results suggested that the evaluation of the difficulty of the choice was not different between limited- and extensive-choice conditions. However, the participants who scored lower on the decisiveness subscale of the need for cognitive closure scale evaluated the choice more difficult compared to those who scored higher on the decisiveness subscale. In addition, an ANOVA on the satisfaction of choice revealed that participants, high on the decisiveness were satisfied with the choice more than those low on the decisiveness. Furthermore, the number of alternatives was associated with the confidence of choice, i. e., participants in the limited-choice condition reported that they were more confident of the choice than were participants in the extensive-choice condition.